

2004.9.7 中川瑞代

夢から夢へ - 大人たちは若者へ夢をつないでいるか？

弁護士として飛び回る生活も既に24年目ですが、これは大学卒業時には夢にも考えていなかった生活です。大学時代のサークルの会報へ記事を書くようにとのことで、あらためて若かったあのころ振り返って見ました。

今の自分では考えられない大胆かつわがままな行動に思い至り、どうしてそんなことが出来たのだろうと不思議な気持ちになりました。

私が弁護士になろうと思ってまず最初に行った行動は、事務員として畑違いの教育学部から就職し、3年目に入った法律事務所で、司法試験受験のために一ヶ月の休暇を貰うことでした。5月の第2日曜の試験のためです。そして親には、一方的に祖母の家で一ヶ月の寄宿生活を宣言して家を出て、祖母の家に一ヶ月間泊まり込み、祖母の上げ膳、据え膳で受験勉強に集中したのです。今から考えると考えも及ばない乱暴な行動ですが、その時は、ただ勉強したいとの気持ちだけで、たいしたこととも思わず動いていたような気がします。

これって、何だったのだろう？と考えたとき、イラクで人質になった3人の若者の姿が自分に重なりました。「通りで生活するイラクの子どもたちのところに行きたい」「行ってお母さんになるという約束を果たしたい」という高遠さんの気持ち、「劣化ウラン弾の放射能に蝕まれる子どもたちを救いたい」という今井君の気持ち、「爆撃下にあるイラクの人たちの姿を伝えたい」という郡山さんの気持ち、3人は、その気持ちに動かされ、自然に行動してしまったのではないかと、そして、その気持ちを大切に考えた周囲の人たちがあってあの行動があったのではないかと、思い至りました。

今私は60歳、司法試験受験を考え始めたころの私の親の年齢になり、母親として、社会に出ようとする子ども二人の旅立ちを祈るような気持ちで日々見つめる自分を発見しています。そして、出来ることなら、子どもたちにも、周囲の迷惑を考える前に、自分のやりたいことに、目標にむかって大胆に動き出して欲しいと考えています。

若者は、目標を持ち、やりたいことに会ったとき、その気持ちに押されて自然に足を踏み出していくものなのでしょう。大人になってしまった私には、その一歩は難しいけれど、せめて、その気持ちを認めたら応援する、そんな大人でいることで、若者だった私のわがままを認め、応援してくれた勤務先の弁護士や両親、祖母の恩に報いてゆきたいと考えています。

私たちの社会は、自分が子どもだったころに大人に支えられたように、それぞれの時代の大人が若者の夢を支え、それぞれの時代の夢が順番に実現されるそのようにして続いて来ていたはずで

す。そう考えてくると、3人の帰国時に自己責任を声高に言いつのった大人たちはいったい、何を考えていたのでしょうか。イラクに出かけた若者たちの一点の曇りもない気持ちを大人として認め、支えることの出来なかった一部の大人たちへの怒りがまた湧いてきます。

私たちは、夢をつなぐ大人になれているでしょうか？